勳であり、柱石でありその功勳と人格識見の偉大なることは世の等しく知る所である。殊に余は直接上官とし又恩師として親しく高教を受けたのである。その恩義温情に對しては余の常に感激措かず、終世忘れざる所である。而して是等の諸賢已に逝きて今や亡し。就いて敎を請はんとするも幽明境を異にしその音容に接することを得ない。追懷何ぞ堪へん。

余先きに茆舍を大磯に營み、公餘休退の處となし、閑を得れば往いて靜養す。春晨夏夕、湘浦の雲濤を望み、高麗山の翠色を眺め、往事を回憶するや、恩師先輩を懷ふの情轉た切なるものがある。依て邸内に小堂を建て、六賢の肖影を壁間に掲げその風貌に接することゝした。同地に在るの日。朝夕香を焚き草花を供へ、肖影を拜し敬慕の意を表するのである。堂に入り肖影に對するや　謹嚴なる板垣伯、重厚なる西鄕侯、機略縱横の兒玉子、溫容如玉の穗積博士、意氣潑溂たる原氏、豪宕卓犖の後藤伯の雄姿が、恰かも生けるが如く眼前に髣髴し、手を把り膝を交へて面語談笑するやうな思ひをなし、その世に在りし日を追憶し瞑想に耽るのである。これが余の大磯に於ける唯一の樂である。余は先賢を敬慕し永く師恩を忘れざるの記念となし、子孫敎訓の資料となさんが爲め、この堂を慕賢堂と命名したのである。

（昭和五、二）

身を以て誦せよ

——田子一民君の說に共鳴して——

「第一線」二月號に載せられたる田子君の『富者の社會に負ふ責務』と題する論文を拜讀しましたが、私も君の所說に全然同感であります。頃日思想善導といふ言葉が流行語となり、政治家も學者も敎育家も宗敎家も思想善導思想善導といふことを言ひ、政府でも之に對する施設をなし、議會でも之に關する論議がありますが、これは固より結構なことでありまして何人も異議はありますまい。併し思想善導なることは、何れの時代、何れの國に於ても必要なることでありまして、今日我が國に於て俄かにこの事が必要になつた譯ではありません。經世家敎育家は每も國民思想の善導に力を致さなければならぬことはいふまでもなく、又每に力を致して居つたこと丶思ひます。田子君もいはる丶如く、能く老人などから『世は澆季』になつたといふことを屢々聞かされるのであります。併しその老人が靑年であつたときにも亦その老人の老人から　同じやうに『世は澆季』になつたといふことを聞かされたことであらうと思ひます。昔し支那の堯舜時代のことを黃金時代の如くいひ、堯舜の政治を謳歌するものがありますが、實際堯舜時代は如何なるものであつたか能く分りませんが、今日文化新進の時代に數千年前の堯舜時代のことのみを夢みては居られません。文化進步し交通開け世界的交涉が盛んになりますれば、物質的にも思想的にも種々の變化の生ずることは免がれないのであります。殊に世界大戰に於て幾億千萬圓の金が消費され、幾千萬の死傷者があつたのでありますから、經濟上にも、產業上にも、政治上にも世界的に非常なる變動が起つたのであります。從つて各國とも國民思想上に變化が起り、社會の不安を惹起したのは止むを得ませぬ。獨逸でも、佛蘭西でも、伊太利でも、露西亞でも、英吉利でも同樣であります。戰後

十年を經過したる今日に於ても、尙ほ波紋は靜まりませんが、年を經るに從つて追々波瀾は消えつゝあります。我が國にも大戰爭の波紋の餘沫が來たのであります。今日は世界交通が容易になり、歐米の空氣潮流が我が國にも流れて來ますから、その餘沫を防ぐことは出來ません。戰後經濟界の狀況を見ましても、產業界の狀勢を見ましても、確かにその餘沫を受けたことが分ります。單に物質界に於てのみならず、思想界にもその影響を受けたのであります。併し我が國の受けた影響はホンの餘沫であつて、歐洲諸國に於ける如き大波紋の中心地とは大に異つて居ます。殊に思想界に於ては我が帝國には三千年來鍛へ上げたる特殊の國民性があり、偉大なる國體がありまして、これは決して動搖することはありません。近時一部の國民の間に所謂惡思想があり、洵に忌むべき事件が起りまして、實に痛嘆に堪へないのでありますが、これはホンの一部の者の全く誤りたる考より起つたのでありまして、國民全體としては決してかゝる思想に動かさるゝことはないと思ひます。併し假令少數一部の間にても、かゝる者があつたとする以上は、吾々八千萬國民は協力一致して之を排擊することに努め我が國體の精華を發揚することに意を致さなければなりません。この意味に於て所謂思想善導の必要なることはいふまでもないのであります。

併し思想善導なることは空論ではいけません。講演や演說によりて國民を指導することも固より必要でありますが、同時に國民生活上に於ける實際問題に觸れなければなりません。兎角我が國に於ては、理窟が多く、議論が多く、その理窟が空理であり、その議論が空論であるやうであります。議會の論議する所を見ましても國民生活の實際には何等交涉なき空論に日を費やし、政府黨も反對黨も之が爲めに渾身の奮鬪をなし、政權の獲得と政權の維持とに苦心努力し、虎嘯龍躍の觀を呈するのは見物人には面白いことでありますが、純眞なる國民は實に苦々しく思ふて居ります。これでは如何にして國民の思想を善導することが出來ませうか。英國の議會では肉の販賣價格に就て意見を戰はし、住宅問題や、勞働賃銀のことに就て實際の

事實に卽して議論を上下するが如き、又伊太利のムッソリニー首相がパンの製造方法に付き、若くはカッフェーや演舞場の夜間禁止や、新聞紙々面の制限に關し法令を發布したるが如き、國民生活の實際問題に就き苦心したることに顧みれば、實に大なる相違があります。爲政者は勿論政治に關與する者は深く玆に思を致さなければならぬと思ひます。

又英國の政黨の綱領政策を見まするに、凡て國民の生活問題に觸るゝものであります。卽ち保守黨の政策の中には（一）産業の合同（二）通貨金融政策、生産費の低下、賃銀の增騰（三）社會施設、借地法、養老年金、寡婦孤兒年金法、住宅建築助成、失業保險法の制定若くは改正、勞働者の株式配當（四）農業政策、農業金融法、地方農業地開發補助、植林賃金法、農業信用法、農産物價格委員會設置等がありまして、この中の大部分は保守黨內閣にて之を實行しました。勞働黨の政策の中には

（一）資本の勞働者と消費者の搾取に對する保護（二）國家資源の增加、産業の個人的自由競爭の經營から協同事業への漸進變革、（三）敎育、公共保健、住宅、年金施療及び失業者救濟、（四）少數階級の不當の富を成さしむる餘剩價値の公共的利益への利用等

がありまして、勞働黨は『今や凡ての實際的經驗から推理されねばならぬ時代に到達した』と主張し、空論や理想論を脫却して、實際問題に入り、實際的大政黨として活動するやうになりました。

又自由黨は十九世紀時代の空虛なる自由主義より蟬脫し、新自由主義の名の下に國民生活上の實際問題を政綱とすることになりました。その中には

（一）勞資の協調（二）經營者との勞務者との經營委員會の創設（三）農業設備改善の爲め低利資金の貸出（四）運賃の低減（五）生産者と消費者の間に介在する仲間業者の排斥（六）借地人の保護、農業勞働者の地位向上

等があります。かくの如く英國の政黨は何れも國民生活の實際問題を標榜し生活の安定向上を圖ることに努力し、選擧に於ても議場に於てもこの標榜の下に互に奮鬪して居ります。かくして政黨は空論を止め、實際政策の實現に熱心し。而かも政局に立つ場合には之を實行するのであります。私は我が國の政黨も國民生活の實際に觸れて互に研究し、國利民福を謀るやうになりたいと思ひます。徒らに空論に馳せ、若くは揚げ足取りをなし、人身攻擊をなし、國家の利害を顧みざるが如きことであつては、國民は政黨に信賴を置きません。その結果は議會政治を呪ふやうになると思ひます。口に思想善導を唱へても政治界の指導者が、かゝる狀態では國民は如何にしてその指導に從ひませうか。日蓮上人の法華經を口に誦する者多きも、心に誦するものは少い、心に誦するものはあつたとしても、身を以て誦する者は自分一人であるといはれましたが、ドーか世の先覺者は身を以て誦する日蓮上人でありたいと思ひます。

（昭和四、三）

關東大震災を懷ふ

——（復興した新帝都を見て）——

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、この日この時こそ我々東京市民に取つて忘れることの出來ない凄慘な記憶を呼び起す、あの關東大震災が起つた日時である。

當時、自分は內務大臣在職中であつて、その時は丁度、霞關の大臣官邸二階の部屋で秘書官の加藤彖四郎君と對談中であつた。囂然たる震動と同時に室內にある書棚は倒れ、書物は拋り出されて散亂し、未だ曾て見ざる大激動であつた。併しその時は普通の地震の少し大きい位に思つて話を續けてゐたのであるが、秘書官が、階下へ下りましよう、地震は少し大きいといつたので自分も椅子を離れた。

この瞬間である、天井に吊られてゐたシャンデリヤがホンの今まで坐つてゐた前の机の上にガタンと落下した。もし自分達が椅子を離れるのが少しく遲かつたならば、我々の頭上にあのシャンデリアが落ちて、少くとも頭部或は顏面に負傷をしてゐたのである。が幸ひにも一瞬間早く椅子を離れたのでこの難を免れることが出來た。それより直ちに階下に下り、各部屋を廻つて庭園に出で尙ほ續いて來る動搖に氣を採んでゐた。

このとき、第一に頭を浮んだ事は宮中のことであつた。がこの時の自分の服裝は白の詰襟服であつたので、フロックと着換へねばならぬと思ひ、早速高輪の自邸へフロックを取り寄せるべく電話を掛けさせた所が不通であるといふので、直ちに自動車を走らせたが、何しろあの當時の事として自動車も色々の困難にブツ突かつたが、漸く自邸に至り所用の品を持つて來たので、それと着替へて宮中に參內した。當時攝政宮に在せられた殿下には、後庭の御座所に御避難であるとのことなので、直ぐその足で御座所に至り、殿下に拜謁して、その時まで分つてゐた都下の模樣について言上し、退出した。そして直ちに臨時閣議を永田町の總理大臣官邸で開くべく各大臣は參集したのである。各所よりの報告も交通通信機關が杜絕したので一向に詳しい狀報を得難く、さほど大きな災害とも考へてはゐなかつたのであるが時々刻々と傳へ來る警視廳からの報告を聞き、尙ほ止まざる震動に憂慮しつゝ、その對策を考へながら官邸屋內では危險だといふので、庭にテーブルを出して閣議を續けてゐたといふ狀態であつた。

引續く各所の火災は遂に官邸の隣、支那公使館をも火焰の內に包んだ。隣りの火災を氣にしながら、この大地震の災害に對する適當なる處置を講じなければならなかつたその時の光景こそ誠に悲愴であつた。

この騷々しい內にあつて各閣僚共に愼重に協議をした。先づ第一に相談した事は大震災に對しての救護のことであるが、未だ震災區域もはつきり分らず、災害の

狀態も詳しい事は一向に知れなかつたので、纏つた對策は出來なかつた。先づ何をおいても罹災民への食糧を供給することが先決問題なので取り敢へず救護に對する費用の臨時支出を大藏大臣と相談して九百八十萬圓の豫備金支出を決定した。更に臨時救護事務局官制の案を、法制局長官に命じて起草せしめた。

この兩件を決定して自分は內相官邸に戻り省員を臨時に召集して應急の處置を取ることを相談した。時は夜に入つたが、電燈は點かず、水道は止まつてゐるといふ始末なので庭にテーブルを持ち出し、蠟燭の淡い光の下で諸種の案を作らしめ省議を開いたのである。今でも憶ひ出すが、その夜は可成り風があつたので机の上に立てた蠟燭の火も時々消えて、眞つ暗になるのでマッチを用意し、點火する主任を定めたといふ有樣で、その任を仰せつかつた人をローソク事務官と呼んでゐた。

各員共に晝間から食事を取る暇さへなく、水も呑まず、徹宵して應急の處置を取つたのである。又自分は災害の狀況を視察するため、警視總監と共に市內を視察するため自動車で官邸を出て神田橋より須田町、上野、方面へ行くつもりで神田橋を越したが、それより先は火焰濛々、その熱に耐へかねたので、止むなく自動車を捨てゝ、歩行した。道々の狀態を見てあまりにも大きな災害であつたのに驚いた。東京市中の米倉庫も殆んど燒けてしまひ、深川の陸軍糧秣庫も火焰に見舞はれたといふ報告を受けたので、關西方面より米、その他の食糧品を得るの手筈を採らんとしたが電話電信何れも不通のため海軍省の無線電信で大阪府廳に打電し、その用意を命じた。更に翌日に至つて市民の恐怖動搖は益々募り、このまゝに捨ておく時はどういふ結果を導くかも知れないので、この際戒嚴令を敷いて人心を落ち附かせる必要があると信じ、緊急勅令を以て救護法と戒嚴令を施行しようとしたのである。緊急勅令は樞密院に御諮詢になる必要があるのであるが、當時樞密院顧問官の所在も解らず召集するの暇もない。しかし議長にだけでもと思つて大森に居られた議長清浦奎吾子にこの事を話すべく使を送らうとしたが大森への交通も杜絶してゐると

いふので、止むなく内田臨時總理大臣と共に濱尾副議長、伊東顧問官の私邸を訪ひかかる事情で樞密院に諮る暇がないから内閣の責任を以てこの勅令を發布したいといふ事を述べた。兩氏とも止むを得ざる事情を了解せられたので、その案を携へて内田臨時總理大臣と共に赤坂離宮に參内して、御裁下を得たといふ次第であつた。

かくして、種々應急の處置を講じたのであるが、當時我々の内閣は前總理加藤友三郎氏の薨去によつて既に辭表を奉呈してゐた際であつたのであるが、未だ後繼内閣も決まらなかつたために、我々はその職責上、出來るだけの處置を取つた次第である。

その翌日山本内閣が成立して、薄暮宮中に於て山本伯が大命を拜し、新内閣が組織せられたのである。

同伯は午後八時總理大臣の官邸に來られたのであるが、ローソクの細々とした光の下で、新舊閣僚の顔合せを終つて後、事務の引き繼ぎを了したのである。

かくして我々の内閣は應急の使命を完ふし退去した。

自分は後任の後藤新内務大臣と官邸に於て事務の引繼ぎを了したのであるが、かゝる大事件の起つた際であるから俱に共に震災前後の處置について努力すべき事を話し合つた。後藤新内相は直ちに震災前後策として東京横濱兩市の復興計畫を立てたのである。後藤伯は東京全市が灰燼となつたこの機會に帝都を復興すべき計畫を立てられたが、その當時伯の理想的復興計畫費は數十億圓といふ大々的のものであつたが。その後財政問題その他のために之を縮少して七八億圓の計畫に立て換へたといふことである。

その後議會にこの計畫豫算が提出されたが再び財政上の都合で復興費用は一億六百萬圓を削除された。

山本内閣は十二月末虎の門不祥事件のため辭職し、翌年一月七日清浦内閣が成立

した。

清浦内閣成立に當つて自分は内務大臣兼復興院總裁の大命を拜し再び震災後の復興計畫を立てなければならぬ地位におかれた。

當時この復興計畫について色々な議論があり、かゝる大金を投じて區劃整理その他のことをなすことは東京市民に取つて大きな負擔となり到底堪へ得る所でなく、又その計畫には非常に杜撰な點もあるといつて、復興院總裁たる自分に對してその計畫を縮少して、適當なる案を立てることを要求した人も少くなかつた。

自分は色々と現時並に將來の事に思を致し、如何に決定すべきかと大いに苦心し研究を重ねたのであつたが、この機會に區劃整理をなし、復興事業を完成する事は東京市の將來に最も必要なることであると考へたので、自分は前任者後藤伯の計畫を實行するの必要を認めて、帝都の區劃整理を實行することとしたのである。

併しながらこれについては前にも述べた如く各方面の苦情もあり要求もあつたから慎重に考慮せねばならないので、當時の市長永田秀次郎君を呼んでその意見を聞いた。永田市長も是非復興計畫として區劃整理を實現したいといふ希望を述べられたのである。然し市長だけの意見では果して市民の聲と見るべきや否やにつき疑があつたので市會の意見をも齎らすべき事を述べた。

その後市會でもこの計畫に同意して是非とも實行してほしいといふ意見を提出して來た。そこで自分は市長並に市會に於てもこの復興計畫の實行を希望する以上その意見を容るるの至當なることを認めて、東京市復興區劃整理事業遂行に關して閣議に諮りその決定を見たのである。

ところが當時議會は解散されたので議會に附議する暇なきため、これに必要なる費用は臨時支出に待たねばならなかつた。依つて大藏大臣と協議したが、大藏大臣も同意して臨時支出をすることになつた。これが今日の復興事業の基礎をなしたものである。

この復興事業については道路の擴築、區劃整理のための市民の住宅移轉その他種々困難の問題が續出したが、是等の困難を排してこの計畫が完成せられて、今や東京市の面目を一新し、立派に盛裝の新東京が生れたことは誠に慶賀に堪へないことである。

過般復興局長官と共に全市に亘り復興の情況を視察し七年間に亘る復興局當局者の苦心と市民の努力が報いられ大體に於て良好なる成績を收め得た事を見て誠に感慨無量であつた。

震災當時に遡つて當時のことを追懐するとき、果して今日の如き成績を收め得るや否や豫期し得なかつたが、今日になつて見れば東京市民の幸福であり、實に後年永く忘るべからざる大事業であつた。

これは元より政府並に東京市當局者の努力によるは勿論であるが、一般市民が幾多の苦痛に堪へてこの事業遂行に努力した結果である。

（大尾）

昭和五年十一月二十五日印刷
昭和五年十一月三十日發行
昭和五年十二月五日再版
昭和五年十二月十日五版

奥附
定價一圓五十錢

著者　水野錬太郎
發行者　小竹卽一
印刷所　共同印刷株式會社
製本所　龍野製本所

發行所　東京日本橋東京驛東口角
振替東京七七二一〇
萬里閣書房

不許複製

萬里閣書房發行書目錄

後藤朝太郎著　支那行脚記　總布木版七度刷裝　四六判四七〇頁　定價二・九〇　送料一四

叔正臣校閲　明治大正勅題歌集　紫羽二重表紙上製　四六判三八三頁　定價二・三〇　送料一二

永井柳太郎序　帝國議會雄辯史　脊皮クロース上製　四六判六〇六頁　定價二・八〇　送料一四

島居龍藏著　滿蒙の探査　總布ボプリン裝　四六判五五〇頁　定價三・五〇　送料一四

島居幸子著　小さき家の裝ひ　總布金箔入上製　四六判二七八頁　定價一・五〇　送料一〇

後藤朝太郎著　支那講談　阿片室　島ノ子木版七度刷裝　四六判五〇〇頁　定價二・五〇　送料一二

生方敏郎著　食後談笑　島ノ子木版八度刷裝　四六判六四〇頁　定價二・九〇　送料一四

清澤洌著　黑潮に聽く　總クロース金文字入　四六判六〇〇頁　定價二・八〇　送料一二

メイ・牛山著　近代美容法　總クロース上製　四六判三三六頁　定價一・八〇　送料一二

東京日日社會部編　戊辰物語　島ノ子木版十度刷裝　四六判三六二頁　定價二・〇〇　送料一〇

萬里閣書房發行書目錄

工學博士 伊東忠太著　木片集　島ノ子木版六度刷裝　四六判五八〇頁　定價三・〇〇　送料一四

山路愛山著　山路愛山選集 第一卷 現代金權史　脊皮クロース金字入　四六判七三六頁　定價三・〇〇　送料一六

山路愛山著　山路愛山選集 第二卷 豐太閤　脊皮クロース金字入　四六判七二六頁　定價三・〇〇　送料一六

山路愛山著　山路愛山選集 第三卷 孔子論　脊皮クロース金字入　四六判七五四頁　定價三・〇〇　送料一六

法學博士 信夫淳平著　明治秘話 二大外交の眞相　總クロース金文字入　四六判五二八頁　定價二・〇〇　送料一二

柳原白蓮著　筑紫集　島ノ子木版廿度刷裝　四六判五四〇頁　定價二・五〇　送料一四

櫻井大路 高木乘著　人相の秘鍵　總クロース金文字入　四六判四四四頁　定價二・〇〇　送料一二

子爵澤寛著　新選組始末記　島ノ子木版八度刷裝　四六判四三四頁　定價二・〇〇　送料一二

酒井靜軍著　橄欖山上疑問の錦旗　總クロース金文字入　四六判四四四頁　定價二・〇〇　送料一四

理學博士 石川千代松著　人間　總布木版五度刷裝　四六判五三〇頁　定價二・五〇　送料一四

萬里閣書房發行書目錄

宮田孝次郎著　珍味佳味　飯と漬物嘗物百種　總布木版數度刷裝　四六判二六〇頁　定價一・〇〇　送料一〇

酒井勝軍著　神州天子國　鳥ノ子木版六度刷裝　四六判五六二頁　定價二・五〇　送料一四

武井武雄著　武井武雄手藝圖案集　總布金箔入上製　キタ判二二〇頁　定價二・五〇　送料一四

江原小彌太著　命經　總布木版數度刷裝　四六判五七〇頁　定價二・五〇　送料一四

小野賢一郎著　陶器を中心に　鳥ノ子木版八度刷裝　四六判四三四頁　定價三・〇〇　送料一四

後藤朝太郎著　支那談　青龍刀　總布木版數度刷裝　四六判四六〇頁　定價二・三〇　送料一四

河原萬吉著　日本情痴集　蓮町錄倉篇　總布木版數度刷裝　四六判五四四頁　定價二・〇〇　送料一四

高村光雲著　光雲懷古談　總布木版數度刷裝　四六判七三〇頁　定價三・五〇　送料一六

門脇晴一郎著　戲曲　お坊ちやん　總布數度刷裝　四六判三八〇頁、　定價一・五〇　送料一二

米澤順子著　長篇小說　毒花　總布數度刷裝　四六判五〇八頁　定價一・八〇　送料一四

萬里閣書房發行書目錄

理學博士　石川千代松著　人間不滅　總布木版數度刷裝　四六版五四一頁　定價二・五〇　送料一四

江原小彌太著　完成改作　新約（上卷）　總布木版數度刷裝　四六版六三八頁　定價二・八〇　送料一四

後藤朝太郎著　支那談　眠れる獅子　鳥ノ子木版數度刷裝　四六版五八六頁　定價二・五〇　送料一四

醫學博士　岡田重一著　スポーツ衛生　總クロース金文字入　四六版二三七頁　定價一・〇〇　送料八

子爵澤寬著　新選組遺聞　總布木版數度刷裝　四六版四〇六頁　定價二・〇〇　送料一四

眞山青果著　戲曲　乃木將軍　總布木版數度刷裝　四六版四〇八頁　定價一・八〇　送料一二

京都府農會技師　宮田孝次郎著　野菜の栽培調理（上）　總布木版數度刷裝　四六版五一四頁　定價二・〇〇　送料一二

法學博士　尾佐竹猛著　夷狄の國へ　幕末遣外使節物語　總クロース金文字入　四六版三八四頁　定價一・八〇　送料一〇

篠岡銀造著　增補　幕末百話　總布木版數度刷裝　四六版五〇九頁　定價二・〇〇　送料一二

宣井きゝ子著　母性愛日記　總布木版數度刷裝　四六版三八〇頁　定價一・八〇　送料一〇

萬里閣書房發行書目錄

假綠茂著	南洋の雄姿	總クロース金文字入 四六版六三〇頁	定價 三・〇〇 送料 一六
東野碧一郎著	天誅組天誅錄	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版三三〇頁	定價 一・五〇 送料 一〇
河野桐谷編 汲談	江戸は過ぎる	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版五四〇頁	定價 二・五〇 送料 一四
醫學博士 岡田道一著	受驗生の健腦法	總クロース金文字入 四六版二三三頁	定價 一・〇〇 送料 八
東京帝國農科大學 宮田孝夫郎著	野菜の栽培調理（下）	總布木版數度刷裝 四六版三九五頁	定價 一・五〇 送料 一〇
皇野竹皇著	貯金王 牧野ニコ／＼成功譚	總クロース金文字入 四六版四二一頁	定價 一・五〇 送料 一〇
東日新聞社者 和田邦坊著	漫畫探訪	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版三五一頁	定價 一・五〇 送料 一二
横山貞雄著	人間大倉喜八郎	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版三七七頁	定價 二・〇〇 送料 一二
東日新聞社會部長 小野賢一郎著	明治大正昭和 記者生活二十年の記錄	總布木版數度刷裝 四六版五九八頁	定價 二・八〇 送料 一六
柳宗悅著	工藝美論	鳥ノ子木版輕裝 四六版一一〇頁	定價 一・五〇 送料 六

萬里閣書房發行書目錄

新山虎治著	肚の人川村竹治	總クロース金文字入 四六版四二〇頁	定價 二・〇〇 送料 一二
關富鐵郎著	臍（へそ）	總布木版數度刷裝 四六版三九〇頁	定價 一・八〇 送料 一二
高岡辰子著	照葉始末書	鳥ノ子木版數度刷裝 四六版四三二頁	定價 一・八〇 送料 一二
アクトル・オブ・ツリロー 有馬純清著	心靈界の驚異	總クロース 四六版三八一頁	定價 一・五〇 送料 一〇
山内侯爵家史編纂部 平尾道雄著	坂本龍馬 海援隊始末	總布木版數度刷裝 四六版四〇九頁	定價 二・〇〇 送料 一二
農學士 原愛次著	應用優生學	總布木版數度刷裝 四六版六二〇頁	定價 二・八〇 送料 一二
東京朝日新聞記者 田原春次著	アメリカ大學案内	總布木版數度刷裝 四六版三〇一頁	定價 一・八〇 送料 一〇
伯國大使館一等書記官 野田良治著	調査三十年 大アマゾニヤ	總布木版數度刷裝 四六版四四七頁	定價 二・六〇 送料 一二
海軍少佐 石丸藤太著	倫敦軍縮會議へ	總布オフセット刷裝 四六版五七二頁	定價 二・五〇 送料 一四
九鬼左近著	江戸近世舞踊史	總クロース金文字入 菊版五九〇頁	定價 五・五〇 送料 一八

波多野承五郎著　食味の眞髓を探る　總布木版數度刷裝　四六判三八八頁　定價一・八〇　送料一四

宮武辰夫著　アラスカに原始藝術を探る　總布木版數度刷裝　四六判三〇〇頁　定價三・五〇　送料一六

政友會總裁犬養毅述　箭は弦を離れたり　島ノ子木版數度刷裝　四六判一四四頁　定價〇・四〇　送料四

澤田勝著　モルガン　島ノ子木版數度刷裝　四六判三五八頁　定價一・五〇　送料一〇

大泉黑石著　讀心術　島ノ子木版數度刷裝　四六判二九八頁　定價一・八〇　送料一二

經濟學博士太田正孝著　人情亡國論　總布箱入上製　四六判三四六頁　定價一・五〇　送料一二

長野朗著　自由支那へ　島ノ子木版數度刷裝　四六判三四〇頁　定價一・五〇　送料一二

岡田健文著　心靈不滅　總布木版數度刷裝　四六判五六五頁　定價二・五〇　送料一四

農學士江越信鳳著　產業より觀たる新ブラジル　總クロース上製　四六判九六七頁　定價四・五〇　送料二〇

佐藤太平著　日本民族戀愛史　總布木版數度刷裝　四六判五九八頁　定價二・六〇　送料一四

ウインストン・チャーチル著　西村二郎譯　大戰後日譚　總クロース上製　四六判七二八頁　定價三・〇〇　送料一六

早稻田中學校教諭門倉秀幸著　代數學解き方のコツ　總皮金文字入　三五判四〇〇頁　定價一・五〇　送料八

波多野承五郎著　陸軍　東海道　島ノ子木版數度刷裝　四六判三九四頁　定價一・八〇　送料一四

淺野中學校教諭石田吉貞著　國文解き方のコツ　總皮金文字入　三五判四〇〇頁　定價一・八〇　送料一〇

大阪東亞通信部副部長村田孜郎著　支那の左翼戰線　島ノ子木版數度刷裝　四六判三二八頁　定價一・五〇　送料一二

佐藤進一著　不老不死　仙人列傳　島ノ子木版數度刷裝　四六判五〇〇頁　定價二・三〇　送料一六

早稻田大學教授川邊喜三郎譯著　政戰哲學　島ノ子木版數度刷裝　四六判二七〇頁　定價一・三〇　送料一〇

口村信郎著　王宮秘聞　ローマ法王　島ノ子木版數度刷裝　四六判六三四頁　定價一・八〇　送料一二

馬郡健夫郎著　熱血宰相　島ノ子木版五度刷裝　四六判三一二頁　定價一・二〇　送料一二

リリアン・ムウエリア著　槇義衛譯　女性に與ふる社會主義の修正　島ノ子木版特製　四六判二八〇頁　定價一・八〇　送料一〇

萬里閣書房發行書目錄

淺野中學校教諭 石田吉貞 著	國文法解き方のコツ	總ナメシ皮金文字 三五判二〇〇頁	定價一・〇〇 送料八	
海軍少佐 石丸藤太 著	軍縮に目醒る	總クロース上製 四六判三九七頁	定價一・六〇 送料一二	
林髮子 著	改訂版 火焰を蹴る	島ノ子木版數度刷裝 四六判四二二頁	定價一・五〇 送料一二	
齋藤秀三郎 著 鮫岡政治 編纂	前置詞及動詞の講義	總クロース上製 菊判六〇八頁	定價五・五〇 送料一八	
濱田成雄 著	南阿開拓の偉人セシル・ローズ	島ノ子木版數度刷裝 四六判三〇三頁	定價一・二〇 送料一八	
エルンスト・グレエザア 著 清田龍之助 譯	一九〇二年級	島ノ子木版數度刷裝 四六判四七二頁	定價一・五〇 送料一〇	
文學士 東京女子高等學校教授 竹友藻風 著	英文學論攷	總クロース特製 菊判三二〇頁	定價三・〇〇 送料一八	
馬郡儲次郎 著	ヂヤヅの歐羅巴	島ノ子木版八度刷裝 四六判四四〇頁	定價一・二〇 送料八	
大毎京城支局長 長永義正 著	グロテスク支那	島ノ子木版數度刷裝 四六判二八三頁	定價一・五〇 送料一二	
布利秋 著	日本沒落か？	島ノ子木版五度刷裝 四六判四〇四頁	定價一・八〇 送料一〇	

萬里閣書房發行書目錄

池田林儀 著	女の畑を覗く	島ノ子木版數度刷裝 四六判三五八頁	定價一・五〇 送料八	
醫學博士 戸田一外 著	船醫風景	總布木版數度刷裝 四六判四七〇頁	定價二・〇〇 送料一〇	
ドクトル・オブ・フイロソフイー 有馬純清 著	唯物論を破る	總クロース特製 四六判二六三頁	定價一・五〇 送料八	
池田林儀 著	新興ドイツ魂	總クロース特製 四六判四七九頁	定價二・〇〇 送料一二	
伊藤松雄 著	半男半女物語	總布オフセット裝幀 四六判四二〇頁	定價一・八〇 送料一〇	
明治大學教授 師尾源藏 著	新朝鮮風土記	特紙オフセット裝幀 四六判五一九頁	定價二・五〇 送料一二	
井上紅梅 著	酒・阿片・麻雀	總布オフセット裝幀 四六判四七四頁	定價二・三〇 送料一二	
大毎京城支局長 長永義正 著	カムチヤツカ大觀	特紙オフセット裝幀 四六判二一四頁	定價一・二〇 送料八	
海軍少佐 石丸藤太 譯	太平洋攻防 世界第二大戰	特紙オフセット裝幀 四六判三六四頁	定價一・五〇 送料一〇	
高木乘 著	指紋の神秘	特紙凸版數度刷裝 四六判三八五頁	定價一・八〇 送料一〇	

エト6A-78

萬里閣書房版